

昭和八年)。

⑥『京都大學文學部陳列館考古圖錄 新輯』(昭和二六年) 圖版二二參照。

⑦梅原未治博士「山城國八幡町の東車塚古墳」(『久津川古墳研究』大正九年)。

⑧藤井治左衛門「岐阜縣不破郡青墓村大字矢道長塚古墳」(『考古學雜誌』第十九卷第六號、昭和四年)、同「岐阜縣長塚古墳第二回發掘品報告」同第十九卷第七號)、同「岐阜縣長塚古墳第三回發掘品報告」(同第十九卷第九號、昭和四年)。

⑨梅原未治博士「玉名郡江田村船山古墳調査報告」(『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第一冊、大正十一年)、及びその後の同博士の調査に依る。

⑩梅原未治博士「河内國小山城山古墳調査報告」(『人類學雜誌』第三卷第八・九・十號、大正九年)。

⑪たとへば丹後國與謝郡岩瀧町大風呂・丸山古墳からも、全長七六厘の鐵製素環頭大刀が出土してゐることを、本書校正中に知ることができた。丸山古墳は宮津灣に臨んだ山上の圓墳で、箱式棺を内部主體とし、

伴出品としては畫象鏡一面、銅鏡十六本が知られてゐる。樋口隆康氏の教示による。

⑫小林行雄「古墳時代における文化の傳播(上・下)」(『史林』第三三卷第三號・第四號、昭和二五年)。

⑬後藤守一「漢式鏡」(大正十五年)。

⑭『魏志倭人傳』に景初三年十二月(原典には二年とあり)倭の女王の獻貢に對する返禮の品を列記した後につづけて、「又特賜_三汝紺地句文錦三匹、細斑華鬘五張、白絹五十匹、金八兩、五尺刀二口、銅鏡百枚、眞珠、鉛丹各五十斤、皆裝封付_二難升米、牛利_一。」とある。銅鏡百枚その他に對して刀二口といふのは少きにすぎると思ふが、それには魏の側に何か理由があつたのであらうか。それとも倭人が刀を欲しなかつたのであらうか。

⑮たとへば有光教一「慶州皇南里第八十二號墳第八十三號墳調査報告」(『昭和六年度古蹟調査報告第一冊』昭和十年)、齋藤忠「慶州皇南里第百九號墳皇南里第十四號墳調査報告」(『昭和九年度古蹟調査報告第一冊』昭和十二年)等を見よ。

第三 三神三獸獸帶鏡について

遺物に關する考察(二)

銚子塚古墳出土の副葬品の中で、つぎに問題とすべきものは十面の鏡鑑である。そのうちの二

面は中國製で、かつわが國において傳世した後にこの古墳に副葬せられるにいたつたものであり、他の八面は仿製鏡であることはすでに前篇で明かにした如くである。

さて、これらの十面の鏡のうちで、まづ第一に取り上げるべきものは、特殊な一面の鍍金鏡であらう。中國において、白銅製の鏡鑑の背面に鍍金を施して、一層その華麗さを増さしめる技が行はれたのは、戰國式鏡に見る金銀錯や、唐鏡における貼金銀の手法との關係を不問に附するとすれば、現在の知見では漢中期と六朝代とのある種の鏡式に限られてゐるやうである^①。前者にあつては本銚子塚古墳出土品に見るやうに、方格規矩四神鏡系統の鏡式に多く鍍金の手法が用ひられ、時には美濃國揖斐郡豊木村城塚古墳出土の遺品^②に示されたやうに、同種の線表出の獸帶鏡にもその事實が認められる。また、後者にあつては肥後國球磨郡人吉町才園古墳出土鏡^③に見るやうに、畫文帶神獸鏡の鏡式を主とするのである。しかも、鍍金鏡は中國においても發見例がさまで多くなく、梅原博士の蒐集せられた多數の資料中にもなほ十數面にとどまり、ひいてはわが古墳の出土品としても從來わづかに以上の二例が管見に存する程度で、かなり特殊な遺品といはねばならない。それをここに新に一例を加へたといふことは、さうした事實としては注意せらるべきものであるが、そのために日本古墳時代文化の價值を左右するほどのものではない。ただ、そのやうな特殊な遺品がわが國に傳へられ、古墳時代の文化圈としては邊境に位置する筑前西端の、本地方の有力者によつて保持せられたといふ點には、將來考察を加へる餘地があらう。

他の一面の舶載鏡である長宜子孫内行花文鏡は、從來わが古墳から發見された例が二十面を超えるほどで、古墳出土鏡としてはかなり普遍的な鏡式に屬するが、他方それがまた朝鮮樂浪郡時代

の古墳出土鏡中にも最も多い鏡式の一つであるところから見ると、以上の二面の中國製鏡が、はたしてこの地方の有力者によつて直接に大陸から輸入せられたものであつたか、あるひは畿内の政權との交渉によつて、國內における再度の移動の結果、この地に落着いたものであるかといふ問題の決定について、示唆するところがあるやうにも思はれる。

つぎに視野を本古墳出土の八面の仿製鏡に轉ずると、そのうちの六面がきはめて相似た鏡式の作品であり、また八面中には二面づつ三組の同范鏡を含む事實が重要視せられるのである。これに肥前谷口古墳出土鏡一面を加算すれば、有銘三神三獸獸帶鏡については、少くとも三面の同范鏡が近接した地域で保持せられてゐたことになる上に、谷口古墳には三神三獸獸帶鏡に屬するまた別種の二面の同范鏡がそれと伴出してゐる事實がある。三神三獸獸帶鏡といふ鏡式自身は、わが古墳出土の仿製鏡としてはもつとも類品の多いものであり、この鏡式に屬する二面の同范鏡が一つの古墳に副葬された前例も、すでに尾張國東春日井郡高藏寺町出川古墳^④や、長門國厚狹郡厚狹町西下津長光寺山古墳^⑤において見出されてゐるが、かく如く數種の同范鏡が一古墳からまとまつて發見せられたといふやうな事實は、攝津國三島郡豊川村宿久庄紫金山古墳^⑥における、各二面づつ二種の同范鏡の共存した例などを、既知の比較的多い場合として挙げうるにすぎなかつた。したがつて、一つの可能性のある解釋として考へられることは、この地方に少くとも數種の三神三獸獸帶鏡の鑄造を行つた鏡作工人が居住してゐて、その製品がその住地の近隣に供給せられ、その地方の有力者の需要を満たしたといふ場合である。まだ確認の機會を得ないが、同じ糸島郡の前原町泊大日古墳から、大さと背文とを等うする獸形鏡が二面出てゐるといふ^⑦ことなども、事實とすればま

た同時に考察すべきことであらう。もつとも、この場合、それを谷口古墳の隣村に當たる東松浦郡鏡村の地名に懸けて論ずるやうな、つきつめた見解は避くべきであるとしても、糸島郡怡土村の一帯が、筑紫郡春日村須玖につぐ銅鉾・銅戈・鎔范の出土地であり、古くより青銅器の鑄造の行はれた土地であることは、十分に参照せらるべきであらう。もし、これらの鏡が糸島・東松浦兩郡地方で作られたものであつたとすると、その中に含まれた有銘鏡の文字の轉寫の正確さも、海外交通輻輳の津としてのこの地方の特殊性によつて、またきはめて有利に説明しうると考へられる。

しかし、この地方における仿製鏡製作の實在を想定するといふことは、單にそれのみにとどまらず、すでに本銚子塚古墳の年代として種々の面から考察した、四〇〇年前後の怡土地方の文化が、さほどまで畿内におけるが如く高度の發展をとげてゐたといふことをも認めねばならないことになる。それはたとへ彌生式時代における青銅製利器の鑄造と、古墳時代における青銅鏡の鑄造とを直結し、技術的な傳統の潜在乃至持續を考慮することにより、その可能性に有力な傍證を與へるとしても、なほ速斷するには相當の問題をのこすのである。はたしてそれは寸毫の反證をも持たぬものであらうか。

まづ考へねばならないことは、銚子塚古墳出土の五種八面の三神三獸獸帶鏡は、すでに述べたやうにわが古墳出土の仿製鏡としてはきはめて類品の多いものである。したがつて、現在管見に存する範圍では、他の地方の古墳からこれと同范の鏡が発見されてゐるといふ事實を知りえなかつたが、調査の對象となる鏡の圖式が五種に上る以上、將來そのいづれかが畿内その他の地方で檢出される可能性がないとはいへない。その場合に、なほそれが北九州のこの地方で作られて、他の地

方へ傳送されたとのみいひうるであらうか。假定の上に立つた議論では不十分であるから、ここに一つの事實を提出しよう。上來しはば参照してきた肥前谷口古墳から發見された鏡は計七面あるが、そのうち四面は仿製三神三獸獸帶鏡で、他は位至三公鏡一面と捩形文鏡二面である。さて四面の三神三獸獸帶鏡のうち、銘字を有する一面は銚子塚古墳のそれと同范であり、他の三面は互に同范である二面と、それによく似た一面との二種の鏡式に屬してゐる。さて、實はこの二種の鏡式のうちの第一は、それと同范で作られ鏡^⑥が攝津國三島郡阿武野村土室阿武山古墳と、近江國野洲郡野洲町小篠原天王山古墳とから、各一面づつ發見されてゐるものであり、その第二もまた、一面の同范鏡が遠く美濃國不破郡青墓村長塚古墳から出土してゐるものである。しかも、前者では近江天王山古墳鏡にもつとも型崩れがはなはだしく、後者では肥前谷口鏡の方が圖文の鮮鋭さを缺く粗鏡である。かうなると、地方の製作者が粗惡な作品は手もとに留めて、優秀品を中央へ差出したとか、中央で作られた鏡のうちで精品はそこに留められて、粗作が地方へ讓られたとか、ある假定を立ててこれらの鏡の製作地を論議することは不可能になつてくるのではあるまいか。

しかし、そのやうな畿内の諸古墳との間に同范鏡の交流の事實の見られるのは、なほ肥前谷口古墳の出土鏡であつて、本銚子塚古墳の三神三獸獸帶鏡の場合においては、有銘鏡を除く、その四種におよぶ鏡式のすべてにわたつて畿内その他にまだ同范鏡の存在が注意されてゐないといふ點を強調して、かりにこの場合九州鑄鏡說に執するとすれば如何であらうか。それに答へるためには、問題の三神三獸獸帶鏡なる鏡式の特性について、しばらく概觀を試みる必要がある。

三神三獸獸帶鏡はいはゆる三角縁神獸鏡の一種であつて、内區に神像獸形を配し、その外側に雙

魚・天・蜺・鳳・鳳・龍・象等、二十四宿關係の動物文をめぐらした獸文帶がある點では、獸文帶三神三獸鏡同四神四獸鏡などと親縁關係にあるが、後者が「天王日月」あるひは「君宜宜」などの文字を配した方形によつて、四分あるひは六分された間に、獸形を一、二個づつ配する構成であるに對し、三神三獸獸帶鏡は一、二の例外的な末流作品を除けば、必ず獸帶中に十個の乳を置いて、その間に十個の獸形を配するといふ不思議な特色をもつてゐる相違がある。

さてかくの如く、三神三獸獸帶鏡は内區に六個の乳をもつほかに、獸帶中にも十個の乳を有するわけであるが、中にはさらにその外側にも十個の乳を附加したものが少數あつて、まづこの點で二群に分けられる。つぎにその内區の獸形が一樣に右向きであるか、あるひは左向きであるかを目標にして、またこれを二群に分けることに一つの意味があるやうである。この場合に三獸中の一つが方向を異にする特殊な例もあるが、それは多い方の向きによつて取り扱ふことができるであらう。さらに獸形の顔の位置が横になつてゐるか、直立してゐるかといふ變化も存在するが、これは複次的なものとして考へて差支へあるまい。第三の鏡式細分の目標は、獸帶中の十個の獸文の種類とその配列の順序とであつて、これによつてすでに十八種以上の組み合わせの實例が知られてゐる。あるひはまた、内區の六個の乳の内外に、しばしば配置されてゐる火焰形の圖形の數と位置も、鏡式の異同を判別する手懸りにはなるが、變化が少いので、決定的な同一性の證據とするには不十分である。以上を整理して表示すると次頁の表の如くなる。

このうち、16大和新山鏡については、その神獸の圖形の整備し、獸帶の圖樣もまた比較的正しく表はされてゐる點を指摘して、早く梅原博士が本鏡をもつて「多くの模造鏡の原型をなせり」とも解せ

番 號	乳 列	獸 形	出 土 古 墳	發見鏡數
1	1	左 横	筑 前 銚 子 塚	2
2		// //	筑 前 銚 子 塚	2
3		// //	筑 前 銚 子 塚	1
4		// //	筑 前 銚 子 塚	1
5		// //	攝津紫金山, 大和新山, 丹波親王塚, 長門長光寺山	5
6		// //	攝津紫金山, 長門長光寺山	3
7		// //	尾張出川, 山城稻荷山, 河内矢作, 近江亀塚, 伯耆大將塚, 等	9
8		// //	美 濃 長 塚	1
9		// //	日向西都原 2 號墳	1
10		// //	攝 津 阿 武 山	1
11		左 直	大和新山, 大和佐味田	2
12		左 ¹ 右 ² 直	攝 津 紫 金 山	1
13		右 横	甲 斐 銚 子 塚	1
14		右 直	肥前谷口, 攝津阿武山, 近江天王山	4
15		// //	肥前谷口, 美濃長塚	2
16		右 直	大和新山, 上野柴崎	2
17	2	左 直	攝津紫金山, 山城妙見山, 備前花光寺山	3
18		// //	山 城 寺 戸 大 塚	1
19*		左 横	攝 津 紫 金 山	1
20*		// //	攝津紫金山, 山城百ヶ池, 等	4

*19, 20は獸帶の獸文の表現が細線化した異例の鏡式である。なほ信濃座光寺鏡の如く本表から除いた異式のものが他にもある。

るるものと稱せられた^⑥のは、今日に
おいても卓見として従ふべきであら
う。内區の獸形が左向きである1—
11の諸鏡式群と、それが右向きであ
る13—15の諸鏡式群とは、この表
に示されてゐない通性として、神獸の
表現が同一群内で類似し、二群間で著
しく異つてゐる事實が挙げられるほ
かに、後者の一群においては、内區の乳
の外方に卍形の圖形が配され、また内
區と獸帶との間に鋸齒文帶を缺いて
ゐるといふ特色がある。もし16の一
鏡をもつて原型に當るものとすれば、
それからこれらの二つの鏡式群が派
生したといへるのである。この場合、
右向きの獸形をもつ原型から、左向き
の獸形をもつ鏡式が導かれることは、
鑄型の製作の際の不注意によつて起

Fig. 19. Several Variations of the Bronze Mirrors with Figures of Three Deities, Three Animals and Zodiac



16

大和新山古墳



7

尾張田川古墳



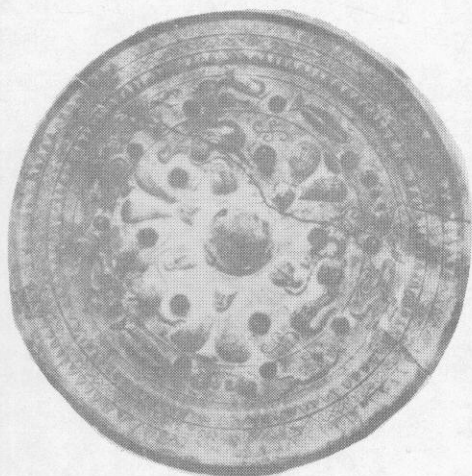
5

攝津紫金山古墳



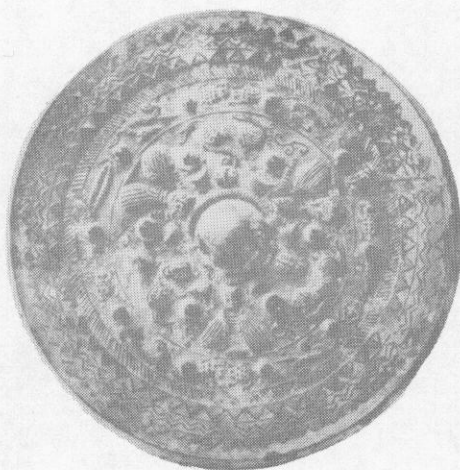
6

攝津紫金山古墳



15

美濃長塚古墳

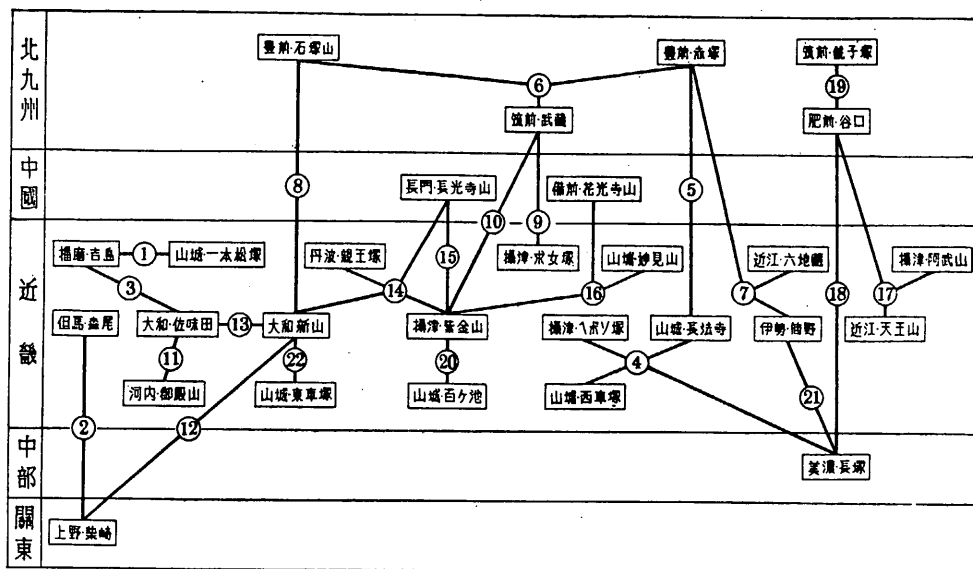


14

肥前谷口古墳

りやすいことであるが、顔の直立した原型から横位の圖形が生まれることはやや説明が困難であらう。したがつて、原型は一種一面に限る必要はないわけである。二重の乳列を有する諸鏡式は、1—11の鏡式に乳列を増加したものとみなすことができるが、獸帶の細部の一致するものはまだ知られない。ただそれらが内區に六個以上の火焰形を有する型式に屬してゐることは、將來の研究のために注意しておく必要があらう。これらの諸鏡式のうちで、16の大和新山鏡一面を除けば、他はすべて仿製鏡であることに異論のないものである。しかも、それらのほとんどすべてが徑二一、二纏のきはめて近似した大きさをもつてゐることも注意すべき特色である。ただしその中で19・20の式は徑二四纏を越す點でも特殊なものである。

わが國の古墳から發見される三神三獸獸帶鏡の通性がかくの如きものであり、本銚子塚古墳出土の四鏡式もまたその埒外に出るをえないものであることが明かになつた以上、たとへ九州鑄鏡説を固執するとしても、その鏡作の工人たちはきはめて密接なる連絡を畿内その他の工人群との間に有したこと、あるひはその一部の移住して、なほ地方的な独自の鏡式を生むにいたるまでの作品とでも見るほかはないことは認めねばなるまい。これではもはや鏡の製作地をこの地方に求めることは、論證しえない一つの希望的想像にすぎなくなるのである。そのやうな方法を選んで推論するまでもなく、四世紀の糸島地方が、すでに畿内に追隨するやうな高度の文化を所有してゐたことは、以上の考察を通じて、別な反面から立證されてゐるのである。すなはち、畿内の同程度の規模の古墳においてすら、一、二面より發見されない場合も多い鏡鑑の、しかも畿内のそれと優劣をわかちがたい鏡式のものが、本銚子塚古墳には八面も副葬せられてゐるといふ事實、それがまづこ



第二十圖 同範鏡出土古墳相互關係一覽圖 Fig. 20.

の古墳の被葬者が、中央の文化といかに親縁な關係をもち、この地方の文化がいかに密接に畿内に直結されてゐたかを物語るにたるものであらう。しかも、再び肥前谷口古墳を引き合ひに出すならば、第二十圖に示すやうに、大和新山・大和佐味田の有名な二古墳から、豊前石塚山・豊前赤塚の二古墳を結んで、再び山城長法寺古墳にいたり、さらに美濃長塚古墳に連なる、相互に同範鏡を分有する古墳の系列の一部へ、本銚子塚古墳もまた肥前谷口古墳を経て接續してゐる事實もあるのである。この表に收録された同範鏡としては、仿製鏡のほかには、舶載鏡をも含んでゐるが、同時に製作せられ、あるひはおそらく同時に將來されたであらう二面以上の同範鏡が、かくの如く九州と畿内その他との間において、分配して所持されたといふことは、少なくとも筑前や豊前の諸古墳をもつて代表される北九州の一部が、これらの諸鏡が國內を移動しつつあつた時期において、密接に畿内と結ばれてゐたことを示すものにほかならない。

註①梅原末治博士『歐米に於ける支那古鏡』（昭和六年）六「鐵鏡鍍金鏡及び方鏡の新資料」参照。

②梅原末治博士『日本考古學論攷』（昭和十五年）第八一圖（下）、後藤守一『古鏡聚英』上篇（昭和十七年）圖版第四二・二等に圖示されてゐる。

③梅原末治博士の調査による。

④梅原末治博士「上代鐫鏡に就いての一所見」（『考古學雜誌』第三四卷第二號、昭和十九年）参照。

⑤弘津史文『防長漢式鏡の研究』（昭和三年）。

⑥梅原末治博士を主査として、京都大學考古學教室が大阪府社會教育課と共同調査に當つた。

⑦後藤守一『漢式鏡』（大正十五年）六九九頁参照。

⑧後藤守一『漢式鏡』七二九頁参照。

⑨梅原末治博士「本邦古墳出土の同範鏡に就いての一・二の考察」（『史林』第三十卷第三號、昭和二十年）。

⑩藤井治左衛門「岐阜縣長塚古墳第三回發掘品報告」（『考古學雜誌』第十九卷第九號、昭和四年）には同種の三神三獸鏡が二面あると思はれる記述があるが、挿圖第五圖として掲げられてゐる二面の鏡の寫眞は、誤つて同一の寫眞を並置したものである。

⑪梅原末治博士『佐味田及新山古墳研究』（大正十年）。

⑫小林行雄「同範鏡による古墳の年代の研究」（『考古學雜誌』第三七卷第六號、昭和二十七年）参照。

なほ第二十圖に番號で示した同範鏡の鏡式は次の如きものである。

- 1 尙方作龍虎獸帶鏡
- 2 正始元年三角緣神獸鏡
- 3 「天王日月」唐草文帶四神四獸鏡
- 4 「天」「王」「日」「月」唐草文帶二神二獸鏡
- 5 「天王日月」四神四獸鏡
- 6 「天王日月」獸文帶三神三獸鏡
- 7 「天王日月」獸文帶三神三獸鏡
- 8 「天王」「日月」獸文帶四神四獸鏡
- 9 「天」「王」「日」「月」獸文帶三神三獸鏡
- 10 「長」「宜」「子」「孫」獸文帶三神三獸鏡
- 11 「君」「宜」「官」獸文帶三神三獸鏡
- 12 三神三獸獸帶鏡
- 13 三神三獸獸帶鏡（仿製）
- 14 三神三獸獸帶鏡（仿製）
- 15 三神三獸獸帶鏡（仿製）
- 16 三神三獸獸帶鏡（仿製）
- 17 三神三獸獸帶鏡（仿製）
- 18 三神三獸獸帶鏡（仿製）
- 19 吾作銘三神三獸獸帶鏡（仿製）
- 20 三神三獸細線獸帶鏡（仿製）
- 21 波文帶三神三獸鏡
- 22 尙方作二神二獸鏡（仿製か）